

モクリコクリについて

今井秀和

一 モクリコクリとは何か

日本語には時折、不思議な響きを持つ言葉が見出されるが、その中のひとつに「モクリコクリ」なるものがある。この単語は時に「ムクリコクリ」などとも呼ばれるが、近世以前の記録や近代以降の民俗資料の内、少なからぬ場合において、得体の知れない妖怪的存在を指して用いられている。本稿ではモクリコクリ・ムクリコクリのどちらが古い形であるのかを探りながらその語源を辿り、またそれらが指すところのイメージの変遷を追う。

これらの単語に関し、近世の著述家の多くや南方熊楠氏は、蒙古・高句麗（もうこ・こうくり）軍にその語源を求めた。モクリコクリについて、南方氏は次のように述べる。

紀州田辺近傍では、近時まで三月三日山に入れば、「モクリコクリ」出るとて、山に遊ばず浜に遊び、五月五日

海に入れば、かの怪出るとて、海に近づかず山に往き、宝の風を吹かしに往く、と言うた。むかし彼輩異国より攻め来たったが、端午の幟の威光でことごとく敗死した。その亡霊が残りおると言う。「モクリコクリ」は、麦畑中に、たちまち高くたちまち低く、一顕一消する、人の形したる怪物と信ずる者あり。神子浜みこのはまにて言うは、魑いたち様の小獣、麦畑におり、夜麦畑に入る者の尻を抜く、と。これは田鼠むくらもちと河童を混製したらしい。

（中略）

またいわく（中略）「モクリコクリ」は、水母くらげ様の物のおおく群れて海上に流れ漂うのだ、と。水母は昼見ても嫌らしく、夜分は眺めると心細くなるような燐光を放つ。水母群を蒙古・高句麗兵水死の靈魂とは、好い思いつきだ（『郷土研究』一至三号を読む）『南方熊楠全集』第二卷 南方閑話・南方随筆他（平凡社 一九七一年四月）

文中「彼輩」^{かのやから}とは、十三世紀に元寇を起こした蒙古軍を指す。本稿には不可欠な内容なので、以下に元寇のおおまかな流れを記す。

元のフビライ・ハン配下の蒙古軍は、文永の役（一二七四年）、弘安の役（一二八一年）の二度にわたって日本に攻め入ろうとした。文永の役における対馬・壱岐への侵略、博多での戦闘行為などにおいて蒙古軍は大きな戦果をあげて引き返すが、それは日本に対して本格的な侵略を開始する前の警告であった。その証拠に文永の役の翌年、フビライは日本に使節を送るのであるが、日本側はこの使節を斬り殺して自ら従属の道を閉ざした。

その後、南宋を滅ぼした蒙古軍は、服属を拒んだ日本を本格的な侵略の対象として軍備を整え、再度攻め入った。これが弘安の役である。しかし文永の役以降、日本も手をこまねいて敵の到来を待っていたわけではない。鎌倉幕府はかつてない警戒態勢の中、防戦の為の準備を行っていた。その結果、博多湾に侵攻してきた蒙古軍は壱岐まで退くことを余儀なくされるが、さらにはそこでも攻められ、平戸近海まで逃れた上で中国からの援軍と合流することとなる。その後台風に襲われた蒙古軍の船団のほとんどが難破し、敗走することとなるが、これは日本の歴史上、余りにも有名な話である。

文永の役、弘安の役を起こした蒙古軍は、蒙古のみならず

異民族部隊を多く含む軍隊であったが、造船や兵の動員などにあたっては、蒙古に敗れてその属国となった高麗（高句麗）がその命を受けていた。つまり、そもそも「ムクリコクリ」とは、「蒙古・高句麗」（もうこ・こうくり）軍を指していたのである。

二 ムクリ、ムクリコクリ、モクリコクリという変遷

さて、ムクリコクリは「蒙古高句麗」の振り仮名などとして、多くの古書で用いられている。まずは一応の指標として、正徳二年（一七一二年）自序『和漢三才図会』を例にあげてみよう。同書には四ヶ所、ムクリコクリもしくはムクリについて触れた部分があるが、いずれの箇所においても「蒙古」のルビとして「ムクリ」が用いられている。例えば巻四「時候」部には「蒙古族」^{ムクリ}の用例が見える。また巻十三「異国人物」部には「蒙古高句麗将攻日本國」という長い記事があり、また同巻は「韃靼人」の別名として「蒙古」^{ムクリ}を載せる。巻七十二之本の「藤社社」の条にも、「蒙古國」^{ムクリ}による日本侵攻の記述がある（『倭漢三才圖會』第一、三、十巻（新典社一九七九年一月、三月、一九八〇年三月））。

『和漢三才図会』以外にも、近世文献にはムクリコクリに関して多くの記述がある。しかし結論から先に言ってしまうば、モクリコクリに関しては、どうやら近代以降の民俗資料

でしかその名を見出すことができないようなのである。

先にあげた南方氏報告のムクリコクリ以外には、例えば愛媛県宇和島市大浦「お伊勢踊り」の文句があげられるが、この文句とても採集されたのは近代であり、その成立をどこまで遡れるものかは分からない。「お伊勢山田の神まつり／お伊勢山田の神まつり／モクリコクリを平らげて／神代君代の国国の／千里の末まで豊にて（以下略）」（河野松夫氏「大浦のお伊勢踊り」『民間傳承』第九卷第二（通卷九二）号（六人社 一九四三年六月）——引用者注…改行部分は「／」で詰め、旧字は適宜新字に改めた。以下の引用に同じでも同じ）。

さて、ムクリコクリに関しては少なからぬ近世文献があると書いた。それらについては追々ふれることになるが、近世より遡るとなると、そのムクリコクリすら見つけられなくなる。しかし「むくり」に関して言えば、古くは『増鏡』（一三三八〜一三七六年の間に成立）にその用例が見える。まずは『増鏡』第八「飛鳥川」を、次に第十「老のなみ」を引く。かやうに聞ゆるほどに、蒙古の軍といふこと起りて、御賀停まりぬ。人人口惜しく、本意なしと思すこと限りなし。何ごともうちさましたるやうにて、御修法やなにと、公家武家ただこの騒ぎなり。されども、ほどなくしづまりて、いとめでたし（第八「飛鳥川」岡一男氏校注

『日本古典全書 増鏡』（朝日新聞社 一九四八年十月）

そのころ、蒙古おこるとかやいひて、世の中騒ぎたちぬ（中略）七月一日おびただしき大風吹きて、異國の船六萬艘、兵乗りて筑紫へよりたる、みな吹きわられぬれば、あるは水に沈み、おのづから残れるも、泣く泣く本國へ帰りにけり（中略）さて為氏の大納言、伊勢の勅使にてのぼる道より申し送りける。／勅として祈るしるしの神風によせくる浪はかっくだけつつ（第十「老いのなみ」前出に同じ）

また幸若舞の台本の内、室町時代末期に成立したとおぼしき大頭左兵衛本『大臣』は、いわゆる百合若大臣の話だが、そこにも大魔王に操られて舟で日本を襲おうとする多数の「むくり」達が登場する（笹野堅氏編「大臣」『幸若舞曲集』本文（第一書房 一九四三年一二月））。

時代が江戸に下ると、やがて幸若舞自体は廃れてしまうのであるが、その詞書きをほぼ踏襲した形で、読み物としての版本、いわゆる「舞の本」が流布するようになる。読み物なので、仮名書きされていた言葉を漢字に直すなどして、読みやすさに配慮してあり、また、そこには挿絵も加えられている。大頭左兵衛本『大臣』とほぼ同内容を持つ寛永整版本（旧刻）『百合若大臣』の中から、ムクリ登場場面を次にあげる。

そも我朝と申は、欲界よりもまさしく魔王の国となるべきを、神自ら開き、仏法護持の国となす。大魔王、

他化自在天に腰を掛け、種々の方便めぐらして、いかにもして我朝を魔王の国となさんと巧むによりて、則天下に不思議多かりき。此度の不思議には、む国の蒙古が蜂起して、四万艘の船どもに、多くの蒙古取り乗り（中略）筑紫の博多に船を寄せ、攻め入るところを聞えければ、『百合若大臣』麻原美子氏・北原保雄氏校注『新日本古

典文学大系59 舞の本』（岩波書店 一九九四年七月）

ここにおいての蒙古（大頭左兵衛本『大臣』、寛永整版本『百合若大臣』どちらも）は、時を経て増幅されたイメージ上の蒙古像であり、それはすでに本来の蒙古と直結するものではない。第一、ここではムクリが集団の名として用いられ、その国名としてはフィクショナルな「む国」が設定してある。さらに「む国」のムクリたちは魔王に操られており、そこに妖怪「ムクリコクリ」の萌芽を見出してもあながち間違いではなからう。寛永整版本『百合若大臣』の挿絵では、「蒙古」たちはすっかり鬼や魔物のような姿をとって描かれているのであるが、そのイメージは室町末期の『大臣』の時点ですでに出来上がったものであった。

鎌倉末もしくは室町初期に成立したとされる『増鏡』や、室町末に成立した『大臣』の中に、蒙古を示す単語として「むくり」が登場しているという事実から考え合わせても、やはり「ムクリコクリ」は「ムクリ」（蒙古）と「コクリ」（高麗）の複合語として捉えられるのである。

俳人、安原貞室の方言・俗語辞典『かた言』（慶安三年（一六五〇年））には、「蒙古をむくりこくりといふはわろし」と云り」という記述があるが、ここでの「わろし」も、ムクリコクリが蒙古のみを指すというのは誤りだ、ということを示すものだろうか（「かた言」近代語学会編『近代語研究』第三集（武蔵野書院 一九七二年一月））。

ムクリコクリという語の成立に関して、貝原益軒（一六三〇～一七一四）の地誌『扶桑記勝』七は、『康富記』を参考にした上で次のように考察する。

蒙古と高麗の兵、日本に來りしを、日本にてむくりこくりと云ふ。むくりとは蒙古也。音通ず。こくりは高句麗也。高麗の本名也。高句麗こくりと音通ず。此事康富記に見えたり。むくりのりの字、蒙古の音の内にあらず。されど和語にとなふるに、こくりと対して、下を相かなへるなり。蒙古國裏と書べしと、先輩の説あれど、さにはあらず。康富記を見ずしてかくはいへり（『扶桑記勝』『益軒全集』第七卷（国書刊行会 一九七三年五月）——傍線引用者）

傍線を引いた部分が、『康富記』の内容に当たる。『康富記』は室町の漢学者、中原康富による日記であるが、その嘉永三年六月一九日には「高麗ヲハ高句麗トモ云也」という記述がある（笹川種郎氏編・矢野太郎氏校訂『史料大成29 安富記 一』（内外書籍 一九三六年九月）。益軒はそれを参考に、

後でふれることになる浮世草子『籠耳』の「コクリ」国裏」説を否定したのである。また益軒の甥、貝原好古も元禄二二年（一六九九年）『諺草』卷之四で次のようにこの説を否定する。

蒙古高勾麗の鬼 後宇多院弘安四年の秋、蒙古國より六萬艘の兵船をうかべて日本を攻、高勾麗の者案内者となり、筑前國博多まで着船す。八月一日俄に神風夥く吹て、蒙古の六萬艘の兵船悉く破損す。是を世にむくりこくりの鬼とて、おそろしき事に云ならはせり。蒙古は元朝の本の名なり。國裏と書は誤なり」（『諺草』『益軒全集』第三卷（国書刊行会 一九七三年五月））

『扶桑記勝』において益軒は、ムクリの「リ」はコクリの音に合わせて、日本において付け足されたものであろうというが、対して平戸藩主松浦静山（一七六〇～一八四一）の随筆『甲子夜話続篇』卷十八の一一に載る行智の説では、これを外国語と捉えている。

布庫里は、蒙古と同じく、地境隣接なるより、音を通わし名付たるにも有べし。蒙古、高麗、モンゴル、布庫里、次下なる、布爾里、恩古倫、正古倫、仏古倫、此等の里は皆助辞にて、此間の語句に、リ音を添ること、一種の格例ならんも知るべからず（『甲子夜話続篇』第二卷（平凡社 一九七九年十月））

文中「布庫里」は清国の山の名であるが、『甲子夜話続編』

卷十八の一〇が引用する『清朝実録』によれば、それは布爾里湖のほとりに住む三女神「恩古倫、正古倫、仏古倫」（湖に住む三女神はゲルマン神話を思わせる）の内の一人「仏古倫」の子にして満州国の始祖、愛新覺羅布庫里の名でもあるという。

『甲子夜話続篇』の言うようにムクリがそもそも外国語なのか、『扶桑記勝』の言うように蒙古が日本語化される際、コクリに合わせて「リ」音が足されたものなのか筆者には即断しかねる。ちなみに寛文六年（一六六六年）『訓蒙図彙』も、その俗名を「むくり」とした上で蒙古に「むく」のルビをふる。

しかし、いずれにせよ室町頃の『増鏡』や『大臣』にムクリはあっても、なぜかムクリコクリは表れないのである。これらのことから分かるのは、文献上見つけられる最も古い形はどうやらムクリだということ、次いでムクリコクリの形が表れるということである。

そして蒙古・高勾麗軍に「ムクリコクリ」という奇妙な名が与えられた時、人知れずその言葉は得体の知れない印象を刻印されてしまった。寛延二年（一七四九年）、立石垂穎『大耶麻騰沙汰文』坤二六は「諺に牟苦利、骨口利といふ。むくりは蒙古、こくりは高勾麗の転語也とぞ」と記す（遠藤

隆吉氏編『日本国粹全書』第四卷（日本国粹全書刊行会 一九二九年六月）。ここではムクリコクリに「苦」「骨」など

の字が当てられ、そのマイナスイメージがさらに強調されている。

「ムクリコクリ」の一部が「モクリコクリ」に変化を遂げたのは、これらの文献が書かれたずっと後、おそらく近代に入ってからのことであろう。すでに述べたように、近世以前の資料にモクリコクリの名は見出せないのである。

三 モウコとモクリコクリ

柳田國男氏も、「妖怪古意」においてモクリコクリについて触れている。柳田氏は妖怪に関する「児童語」（子をあやす時に女性が使う言葉や、子自身が使う言葉）に着目した。そして、モウコ・モコなど小正月の来訪神を示す名称（それらの言葉はときに、もっと妖怪じみた存在をも指す）について次のような考えを持っていた。

モウコ又はモコといふ名称なども、近頃文字を解する者はほゞ一致して蒙古のことだといふやうになつて居るが、それは弘安の役などの歴史知識が、普及せぬ以前には考へられそうに無く、たまゞさういふ説を立て、も記憶せられさうにも思へぬから、起源のよほど新しいものと見ることが出来る（中略）所謂モクリコクリの名称は、かなり夙くから中央の文献にも見え、これをお化けのことの様に、思つて居た子供も少なくは無かつた。それが暗々裡に東北の蒙古説を誘発したまでは意外とも言へな

い。我々の不思議とするのは、寧ろこの善意なる初春の訪問者が、さういふ異國の凶賊の名と解せられて、何人もこれを否認せぬ時代まで、なほ以前からの外形と言葉とを、ほゞもとの儘で持ち続けて居たことである（「妖怪古意」『定本 柳田國男集』第四卷（筑摩書房 一九六八年九月新装版））

柳田氏はここで、妖怪を指すモウコ・モコなどの民俗語彙の語源が「蒙古」だという説には難があるとし、化け物の鳴き声を「モウ」という習俗に、その語源を求めたのである。ではなぜモウコが蒙古と関連付けて考えられるようになったのか。柳田氏はモウコ＝蒙古説を生み出した背景には、ときに妖怪として捉えられる言葉であったモクリコクリ（蒙古高句麗）が関係していたと考えた。モウコとモクリコクリはどちらも妖怪の名称かつ児童語だった為、かような混乱が生じたのであろう、というのである。

実はモクリコクリは、ムクリコクリであった近世の時点ですでに児童語としての一面を持ち合わせていた。しかし、もちろんそれは後天的に足された属性である。洋の東西を問わず、妖怪の名をもって子を脅し泣き止ませたり、いたずらの戒めとする習俗は多いが、たとえばムクリコクリは、近世において次のような語られ方をする存在でもあった。貞享四年（一六八七年）の浮世草子、艸田斎『籠耳』^{かごみみ}から、後に喜多村筠庭『嬉遊笑覧』や山崎美成『世事百談』にも引かれるこ

ととなる「蒙古国裏鬼」(巻中)を引用する。

小児の啼を止るとき、むくりこくりの鬼が来るといふ事(中略)元の国を蒙古国とも云也。世祖よりこのかた、大元と号せり。さるによつて、むくりこくりといふハ、蒙古国裏といふ事のいひあやまち也。鬼がくるとハ、この夷賊を云なり。又いとけなき子を威嚇と云ふに、顔をしかめて元興寺といふ事あり。むかし大和の国元興寺といふ寺に、鬼すみて人をなやますとて、世間さハがしき事有。本朝文粹に見えたり。これよりして元興寺とて、顔をしかめておどせば、小児なきやむといえり。又小児を賺しゆぶるとき、虎狼来くといふ事もあり。もろこしにてハ張遼来といへハ、小児なきやむとあり。張遼といふもの。たけき兵にてありしと也。又日本にて手をくみ、面にあて、手、甲といふて、小児をおどす事もあり。予がいとけなきとき、乳母どもが、姑獲鳥が来るといへば、身にしみておそろしき夜おかりし(「籠耳」武藤禎夫氏・岡雅彦氏編『新本大系』第四卷(東京堂出版 一九七六年六月))

この後、姑獲鳥(子を攫う妖怪の名)に関する話が続くのだが、それは本稿に關係ないので省く。さて文中「むくりこくりといふハ。蒙古国裏といふ事のいひあやまち也」という説が展開されるが、これは前出の『扶桑記勝』において「蒙古国裏と書くべしと先輩の説あれど、さにはあらず」と否定

されていた説だろう。元禄八年(一六九五年)『頭書増補訓蒙図彙』などもこの説をとるのだが、この「コクリ」国裏」説は牽強付会以外の何者でもない。

しかし、ここで最も重要なのは、「むくりこくりの鬼が来る」という台詞が、小児をあやす際の脅し文句として使われていたという点である。しかも、同じような脅し文句として、元興寺、虎狼来、帳遼来、手、甲、姑獲鳥などが紹介される。これらの内、元興寺の鬼と姑獲鳥は、妖怪絵師として名高い鳥山石燕が絵にしている(石燕描く「元興寺」には「ぐハごせ」とルビが振ってある)。

小児を泣き止ませるのにムクリコクリを持ち出すことは、宝永七年(一七一〇年)成立、仙台の沙門梅国が著した『桜陰談』にも見える。同書は漢文なので「蒙古高勾麗」と書かれるだけだが、他書に照らし合わせてみて、その訓みがムクリコクリであったことはほぼ間違いないだろう(「桜陰談」鈴木省三氏編『仙台叢書』第一卷(仙台叢書刊行会 一九二二年十一月))。

柳田氏がモウコ蒙古説の背景にムクリコクリの介在を想定した背景には、以上のように、そのどちらもが児童語であったという共通点があったろう。ただし、南方氏・柳田氏ともに、ムクリコクリとムクリコクリの違いには無自覚であった。しかし本稿で解き明かしつつあるように、これらは並列的な関係ではなく、本来時系列的に語られるべき関係なので

あった。

四 ムクリコクリの鬼

正保五年（一六四八年）に刊行された、俳人北村季吟の『山の井』には、京都の節分にまつわる次のような記述が載る。「夜にいればむくりこくりのくるといひて。せど門窓の戸などかたくさして。外面にはいはしのかしらと。ひらぎのえたを鬼の目つきとてさし出し」（近世文学書誌研究会編『近世文学資料類従 古俳諧編(19)』（勉誠社 一九七三年十一月））

ここからは、節分の夜になるとムクリコクリが来ると言っ
て戸締りを固くし、戸の外側には鱒の頭とヒイラギの枝を
「鬼の目突き」といって飾り付けていたということが分かる。
別の書で度々「むくりこくりの鬼」と書かれることがあるよ
うに、やはりムクリコクリは鬼と同一か、その一種といった
捉え方をされていたのであろう。

鱒の頭とヒイラギに関しては現在の節分でも行われている
が、鬼ではなくムクリコクリを恐れて戸閉まりを固くすると
いう話は聞かない。興味深いのは、ここでムクリコクリが、
節分という特定の時季に行われる行事と関連して語られてい
る点である。冒頭で紹介した南方氏の説では、三月三日と五
月五日がムクリコクリの出現を恐れる日であった。特定の日
にムクリコクリの出現を恐れるという風習の根底には、その

日に蒙古襲来があったと信じられていたことだけでなく、
『山の井』に記録されたような、節分の鬼とムクリコクリと
の同一視が関係しているのかもしれない。

さて、本来蒙古・高句麗軍を指していたムクリやムクリコ
クリが、「むくりこくりの鬼」のように、あたかも人外のも
ののように言い習わされてきた過程についてはすでに見てき
た。そこには「ムクリコクリ」という単語の、いわば外枠を
同じくして中身が入れ替わっていく変遷の様子が見て取れる。
しかしながらムクリコクリという単語の示す意味は、近世文
芸において、ときに更なる変化を遂げているのである。例え
ば近松門左衛門（一六五三〜一七二四）の台本において、ム
クリコクリ＝理不尽、という連想から、この単語は甚だしく
理不尽な状態を表現する際にも用いられている。さらに、本
来のムクリコクリには含まれていなかった「むくる」（むく）、
「こくる」（こそぐ）の意味とかけて用いられている例もある。
近松の作品から、それらの例をあげてみよう。

まずは『日本武尊吾妻鑑』から、理不尽な状態を表す際に
用いられるムクリコクリを示す。「神国に生て神さた（沙汰）
をてうじ（停止）とは。正じんのむくりこくり」（近松全集
刊行会編『近松全集』第一巻（岩波書店 一九八九年八月）
——ルビとしてふられていた漢字は引用者がカッコ内に補筆
し、読解に不要な記号などは省いた。以下も同じ）

また『用明天皇職人鑑』には、「むくりこくりが以ての外」

「あつたら娘もしんだい（身代）もむくりこくりにむくりと（取）られんことふびん也との御たくせん（託宣）」「いか成るむくりこくりがもと（元）首でも此ことふれ（事触）がたちさき（太刀先）にて。むくつてこくつて切まくつて」のよ
うな用例がある（近松全集刊行会編『近松全集』第四卷（岩波書店 一九八六年三月））。

『用明天皇職人鑑』の最初の引用部分は『日本武尊吾妻鑑』と同じように理不尽な様子を表しているが、後の二つの引用部分はそれに加えて「むくる」や「こくる」の意味が付加され、理不尽に娘と身代とをむしりとしていく様子などが強調されている。また、これと同じ用法が『心中二枚絵草紙』にも見出せる。「やつかいしつかい（厄介悉皆）むくりこくりの上手ごかしに。むくりと（取）られたとの御たくせん（託宣）」（近松全集刊行会編『近松全集』第四卷（岩波書店 一九八六年三月））。

『心中二枚絵草紙』では「やつかいしつかい」「むくりこくり」という似たような語呂の言葉を組み合わせることで、さらに面白い語感を作り出している。

このような語呂合わせの言葉遊びとえば狂歌であるが、やはり狂歌師はこの面白い語感にいち早く目を付けていた。慶安二年（一六四九年）序、石田未得『吾吟我集』には次のような歌が載る。「くるみをわる人を見て／おにくるみわりそこなひて手のかはを むくりこくりと身は成にけり」（狂

歌大観刊行会編『狂歌大観』第一卷本編（明治書院 一九八三年一月）

ここでは「オニグルミ」と「むくりこくりの鬼」、「むくり」と「剥く」、「身」と「実」とがかけられている。これらの例は、ムクリコクリという言葉が持つどこかユーモラスな音の印象を汲み取って強めたものと言えるだろう。

五 虚像としてのムクリコクリ

歴史上、元寇のような大規模な侵略行為がそうそう頻繁に起こるわけではない。侵略とは、侵略する側の国内情勢がある程度安定している上に、かなりの国力を蓄えていなければ実行できないものである。加えて日本は大陸から離れた島国であり資源にも乏しい為、長い歴史にあって本格的な侵略の対象となることは少なかった。ただ、侵略される側としては一度襲撃を受けた以上、長くその脅威に不安を覚え続けることとなる。

こうした脅威に対する警戒心は、やがて漠然とした外部（異界）に対する恐怖感へと姿を変えた。そして蒙古・高句麗軍という実在の軍隊は「ムクリコクリ」などという言葉に変わり、その指すところも現実的な外国兵から、得体の知れない妖怪的存在へと姿を変えたものと考えられる。

そしてさらには、そこに新たな特性が混入するようになる。ムクリコクリを水死した蒙古・高句麗軍の霊と捉えたり、そ

の姿をクラゲの大群に投影したりしている分には、まだ本来の意味を継承していると言える。しかし、例えば南方氏が報告した幾つかのモクリコクリにおいては、背丈が伸び縮みする「見越し入道」のようなものと思われていたり、はたまたカップやムグラモチの特性が付加されていたりするのである。ちなみに「ムグラモチ」はモグラのことだが、「ムグラ」と「モクリ」の音を通じる為に、左様な混乱を招いたものであろう。

笑話であるが、寛永（一六二四〜一六四四）初年頃に成立した『きのふはけふの物語』下巻や『醒睡笑』卷之五には「むくりこくりの卵」なるものまで登場する。鰻頭を知らない人たちが、それをムクリコクリの卵と勘違いして大騒ぎする話なのであるが、この話は、ムクリコクリが得体の知れない存在であったからこそ生き生きとしている。

蒙古・高句麗軍という実在の存在がムクリコクリそしてモクリコクリなどという得体の知れない化け物へと姿を変えた一方で、蒙古軍を敗走せしめた台風には「神風」の名が与えられ、これはこれで後世、本来の意味を超えた使い方をされるようになる。

言葉は本来、何か特定の事象なり概念なりを指し示すものであるが、その何かの存在が薄れていった時、往々にしてその言葉に新たな意味が付加されていく。言葉の原義を探ることは、その意味の変遷を追いかけて行くことでもあり、そう

した作業を通して民衆の意識の変化を通観する事もできるのである。